

「文明」と「野蛮」の自己認識

— 近代日本の他者表象 —

山口 公 一

はじめに

本論の課題は、近代日本の「他者表象」について、日本と朝鮮の関係から論じることにある。

歴史学における「自己認識」とは何か、「他者表象」とは何かという議論は、一九九〇年代以降、継続して盛んになされてきた。^①例えば、「表わされた」資料の表象に焦点を当てることで、文字言語、音声言語、絵画、石碑などが有する社会的性格・機能の解明が目指された。^②また、東アジアにおける近代化志向を規定し方向づけた要因の一つとして、表裏一体としての「自己認識」として他者認識の解明が求められた。^③今日に至っては、「表象」を扱う研究はポピュラーなテーマの一つとなっている。

「自己認識」や「他者表象」を明らかにすることを通じて、ある一定のイメージ（それは歴史像であったり、人間像であったり、社会像であったり、国家像であったり、地域像であったりする）を提起するといった課題は、その解明が追究される過程で融合して論じられる研究動向にある。^④それは歴史学の隣接諸科学においてもそうした傾向がみられる。

例えば、社会心理学の分野で、表象について、「私たちは眼前に存在する対象 (presentation) を、それが存在しなくなった後にも、心に描くことがある。心理学では、こうした記憶を中心とした心的作用に基づく存在を表象 (representation) と呼んでいる。つまり、表象とは対象を心に描いた像のことを指し、多くの場合記憶されているものと考えられている。もちろん、心に描いた像を再度眼前に存在する対象として再提示したものを、表象と呼ぶこともあるだろう」と定義づけている研究者も存在する。^⑤

こうした「他者表象」と「自己認識」といった融合された分析視角を手がかりに、近代日本の「他者表象」としての朝鮮を「自己認識」から論じていきたいと考えている。

アジア学科共同研究会の趣旨においても、「アジアが「アジア」として立ち上がってくるのは自明のことではない。長い歴史を通じて、それぞれの主権、主体は自己を特権化するために、他者をさまざまに表象して来た。

他者表象はまぎれもなく自己認識の反映であり、同時に対象として意識された他者に対する関係意識の反映でもある。多様な民族的、文化的、宗教的、政治的な他者の競合、共存のアリーナとしてのアジア諸地域において、どのような相互表象が行われてきたのか、アジア諸地域間における交流の様相を明らかにするべく他者表象の歴史をふりかえる」と提起されている。⁽⁶⁾このことも広く人文社会科学において、「他者表象」と「自己認識」といった問題設定が有効であるとする共通認識が今日まで醸成されてきたことを示す一事例と考えられよう。

以上の問題関心に基づき、本論では、近代日本の「他者表象」、すなわち、近代日本は朝鮮をどう見ていたのかを、近代における日本人（主に知識人層）等の言説分析を踏まえて、明らかにしていくこととする。まず、一章では、近代日本における「文明」のものさしが明治の知識層にどの程度受容されたのかについて、昨今の研究史をふまえつつ、一般的理解として概観することと

したい。二章では朝鮮総督府の調査資料である『朝鮮人の思想と性格』における朝鮮人表象の資料配置を分析することで、近代日本の「他者表象」の意味についての考察の試みとしたいと考えている。そのことは、翻って、近代日本はどのような自己認識を持っていたのかという問いかけにも、一定の応答可能性をもつと考えている。

なお、史料中に、現在、一般に使用されない用語や差別語が含まれている場合でも、歴史的な用語として、そのままにしてあることを予め断っておきたい。

一、「文明」というものさし

(1)「文明」というものさし

近代日本における「文明」化とは、ヨーロッパ近代の受容として理解されてきた。それは、東アジア地域において、「西洋の衝撃(ウエスタン・インパクト)」がもたらされて以来、華夷秩序に基づく前近代の中華世界からの変容・再編のもとで、紆余曲折を経ながら、追求された近代化の道であった。こうした「文明化」は、近代国家、すなわち国民国家の形成を伴うものであって、同時にそこに生きる人びとを「国民」化する過程でもあった。⁽⁷⁾また、「近代世界は、資本主義的生産様式が支配するひ

とつの「世界システム」であつて、そこに存在する国民国家が競争し、対立しあうアリーナという形で存在している」と定義づけられ、「文明化は、資本主義的世界システムに組み込まれたあらゆる地域と人びとに強制されるものなのだが、このシステムが国民国家単位で競い合う国際社会というアリーナを構成しているという事情が、国民国家に文明化のための統合という課題を与え、国家にそのために必要とされる手段のための権限・強制力を賦与したとされる。⁽⁸⁾一九九〇年代によく議論された国民国家論は、文明化のための国民統合という文脈で、日本の近代である幕末維新から明治期を転換期として説明しようとしたのだ⁽⁹⁾。

今日における「文明」化の議論を見ると、上記のような見解を踏まえつつも、「政府主導」的「文明開化」論をいさめ、明治の同時代人がみずから西洋の価値を信じ、それを日本に定着させようとしたことを再評価するなかで、「文明開化」の多様性を強調し、改めて西洋文化の受容を理解しようとする傾向をみてとれる。⁽¹⁰⁾

西洋の「文明」がどのように受容されていったのかという点において鑑みると、明治初期、「文明開化」という用語が日本社会に普及したきっかけが、福沢諭吉によ

るものであったことはよく言われるところである。⁽¹¹⁾

本題である「文明」、つまり、ヨーロッパ近代の受容のあり方を福沢が世界的にどう論じたのかを見ておこう。福沢は、その著書『文明論之概略』（一八七五年）で世界の「文明」を以下のように論じた。

今、世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と爲し、土耳其、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、⁽¹²⁾阿非利加及び⁽¹³⁾埃太利亞等を以て野蛮の国といひ、この名称を以て世界の通論となし、西洋諸国の人民、独り自ら文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自からこの名称を誣⁽¹⁴⁾ざるに服し、自から半開野蛮の名に安んじて、敢て自国の有様を誇り西洋諸国の右に出ると思ふ者なし。…中略…然らば則ち彼の文明、半開、野蛮の名称は、世界の通論にして世界人民の許す所なり。そのこれを許す所以は何ぞや。明にその事実ありて欺くべからざるの確証を見ればなり。…中略…即これ人類の当に経過すべき階級なり。あるいはこれを文明の齡⁽¹⁵⁾というも可なり。…後略…

福沢は、「文明」というものさしによって、世界を序列化した。「最上の文明国」であるヨーロッパ諸国とアメリカに対して、「半開の国」として、トルコ・中国・日本などアジア諸国を「半開の国」とした。そして、「半開」に満たない「野蛮の国」に、アフリカやオーストラリアなどを位置づけたのである。この「文明」——「半開」——「野蛮」という序列は、「半開の国」、「野蛮の国」にあつて認めざる得ないもので、人類が通過すべき「文明」の一段階として、世界中の人びとが許容しているものとした。福沢は、ヨーロッパは日本と比べて相対的に文明の齢を重ねているのだから、これを手本とするべきであるという考えの前提となる「文明」のものさしを示したのである。日本の文明化を積極的に進めたい福沢にあつても、ここに示された「文明」のものさしは、あくまでも相対的な基準であつたと言えよう。それはヨーロッパ諸国が戦争を常に行うことをもつて、文明に足らざる部分があると評価していることからも理解できよう。

一八八五年三月、福沢は『時事新報』において「脱亜論」を発表した。

我日本の国土は亜細亜の東辺に在りと雖ども、其国民の精神は既に亜細亜の固陋ころうを脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰こゝに不幸なるは近隣に国あり。一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二国の人民も古来亜細亜流の政教風俗に養はるゝこと、我日本国民に異ならずと雖ども、其人種の由来を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも遺伝教育の旨に同じからざる所のある歟、日支韓三国相対し、支と韓と相似るの状は支韓の日に於けるよりも近くして、此二国の者共は一身に就き又一国に關して改進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非ざれども、耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、其古風旧慣に恋々するの情は百千年の古に異ならず、此文明日新の活劇場に教育の事を論ずれば儒教主義と云ひ、学校の教育は仁義礼智と称し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、其実際に於ては真理原則の知見なきのみか、道德さへ地を払ふて殘刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し。我輩を以て此二国を視れば、今の文明東漸の風潮に際し、迥も其独立を維持

するの道ある可らず。…中略…

輔車唇齒とは隣国相助くるの喩なれども、今の支那朝鮮は我日本国のために一毫の援助と為らざるのみならず、西洋文明人の眼を以てすれば、三国の地利相接するが為に、時に或は之を同一視し、支韓を評するの価を以て我日本に命ずるの意味なきに非ず。例へば支那朝鮮の政府が古風の専制にして法律の特む可きものあらざれば、西洋の人は日本も亦無法律の国かと疑ひ、支那朝鮮の士人が感濁深くして科学の何ものたるを知らざれば、西洋の学者は日本も亦陰陽五行の国かと思ひ、支那人が卑屈にして恥を知らざれば、日本人の義侠も之がために掩はれ、朝鮮に人を刑するの惨酷なるあれば、日本人も亦共に無情なるかと推量せらるゝが如き、是等の事例を計れば枚挙に遑あらず。之を喩へば比隣軒を並べたる一村一町内の者共が、愚にして無法にして然かも残忍無情なるときは、稀に其町村内の一家人が正当の人事に注意するも、他の醜に掩はれて埋没するものに異ならず。其影響の事実に現はれて、間接に我外交上の故障を成すことは実に少々ならず、我日本国の一大不幸と云ふ可し。左れば今日の謀を為すに、

我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予ある可らず。寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分す可きのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。

従来の研究においては、福沢の「アジア改造論」から「アジア侵略論」への転換点として、「脱亜論」を位置づけてきたが、現在、こうした見方を否定する成果も出てきている⁽¹⁵⁾。その根拠は「脱亜論」の以下の部分である⁽¹⁶⁾。

幸にして其国中に志士の出現して、先づ国事改進の手始めとして、大に其政府を改革すること我維新の如き大挙を企て、先づ政治を改めて共に人心を一新するが如き活動あらば格別なれども、若しも然らざるに於ては、今より数年を出でずして亡国と為り、其国土は世界文明諸国の分割に帰す可きこと一点の疑あることなし。如何となれば麻疹に等しき文明開化の流行に遭ひながら、支韓両国は其伝染の天然に

背き、無理に之を避けんとして一室内に閉居し、空気の流通を絶て窒塞するものなればなり。

福沢は清国政府・朝鮮政府が「文明開化」の流行に逆行し、これを避けようとしており、それが「文明」の東アジアへの広がりを妨げている。清国・朝鮮両政府が改革を志向しないのであれば、国は滅びるのであると警告し、清国・朝鮮両政府に自己改革を促す主張であり、この段階で福沢がアジア侵略を志向していたわけではないというわけである。しかし一方、「脱亜論」段階で、福沢が「アジア改造論」を放棄したわけではなく、それが日清戦争後に「世界文明の立場」へと変わっていったとする成果が提起されている。¹⁸⁾

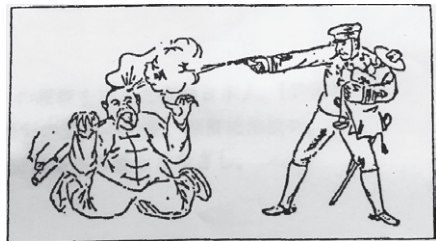
こうした「脱亜論」の評価の変容についての議論はあ
るにしても、福沢が当初から「文明」と「野蛮」という
ものさしで世界を見ていたことは明らかであろう。そし
て、「脱亜論」に示された福沢のアジア観が、清国・朝
鮮を、「文明」に比して、時代遅れの旧習にまみれた地
域、国々と位置づけていることも事実である。そして、
こうした「文明」のものさしは、『時事新報』や福沢の
著書や教育によって、明治期の日本社会、特に官僚や知

識階層に広がってい
たと考えられる。同時
に、福沢の「脱亜論」
などの論説を通じて、
清国・朝鮮（アジア）
は遅れた国という見方
もまた、こうした階層
に広がっていたと言え
るだろう。

一八九四年に日清戦
争が始まると、福沢は

「日清の戦争は文野の
戦争なり」として、「文明の国」である日本による、「文
明開化」を妨げんとする「野蛮の国」清国政府の排除で
ある、清国を目覚めさせるために行う文明への誘導と位
置づけた。¹⁹⁾

福沢は、日清戦争を日本による清国への「文明」の普
及という目的をもつものと正当化した。福沢のこうした
日清戦争観は、「図」のようなかたちで、新聞を通じて、
日本社会に向けて、わかりやすく宣伝されることとなっ
た。日清戦争が日本という「文明国」が清国という「野



〔図〕「文明の銃撃」（『時事新報』1894年8月
8日、歴史学研究会編『日本史史料4近代』
岩波書店、1997年、223頁所収）

蛮国」に対して、「文明の銃撃」を行ったとするものである。²⁰

新聞による宣伝もあって、こうした「文明の戦争」観は、戦争を否定する論者も取り込み、日本社会における日清戦争の支持を広げていくことになった。

一九世紀末には、日本社会の大勢が「文明」のものさしによって、帝国主義の時代の「弱肉強食」の世界観を理解し、「文明」の普及のための戦争を正当化する見方を有していたといつていいだろう。こうした見方は、一八四〇年のアヘン戦争に際して、イギリスが、清国との戦争を正当化する際に宣伝された「文明」のものさしであった。²¹それからおよそ半世紀を経て、日本社会は、ヨーロッパの価値基準である「文明」のものさしを確固たるものとするこゝとなつた。

(2) 明治期知識人の韓国観

「文明」のものさしを手に入れた日本社会は、日清・日露戦争を経て、「半開の国」から自らを「文明国」と位置づけるようになった。その裏返しとして、「未開」つまり「野蛮」の存在を他者に見いだすこととなつた。

例えば、明治期の代表的な「進歩的」知識人の一人と

される言論人・歴史家の山路愛山は、一九〇四年五月に韓国釜山を訪れ、以下のような紀行文を残している。²²

午前一〇時釜山港に入る。…中略…釜山の市街を見、始めて韓人の生活に接す。街路に市を開きて物を売るは越後新潟辺の朝市にことならずして、ただその極めて汚穢なるを異にするのみ。…中略…持統天皇御詠にいわく、春過ぎて夏来にけらし白砂のころもほすてふ天のかぐ山 時まさに春夏の交、韓人の白衣を干すこと真にかくのごとし。僕の目に映じたる韓人は実にわが奈良朝時代の復活なり。ただ韓人の生活は精神なき奈良朝生活にして、奈良朝の生活は精神ある韓人生活なるを感ずるのみ。韓人の労働者は身幹体力とも邦人に勝る。すこぶるノン気至極なるものにして餒ゆればすなわち起きて労働に従事し、わずかに一日の口腹を肥やせばすなわち家に帰って眠らんことを思う。物を蓄ふるの念もなく、自己の情欲を改良するの希望もなく、ほとんど豚小屋にひとしき汚穢なる家に蟄居し、その固陋の風習を守りて少しも改むることを知らずという。僕ひとたび釜山の地を履んで実にただちに韓国経営の容易

の業にあらざるを知るなり。途上に遇うところの韓人ことごとく長き煙管を携え閑あればかならずこれを喫す。またメンタイ魚と称する乾魚をむしりつつ食うものあり。もつとも蒜、唐辛しを好み、食物にはかならずこれを用う。その刺激興奮の食料を貪食することまことに未開の本色を現わせりというべし。

山路は初めて韓国の釜山を訪れた所感として、韓国人の生活は日本でいう奈良時代の復活ともいえる。韓国人は身体能力は高いが、呑気で一日分の食糧を得る最低限の労働をして帰って寝るだけで、生活を改良する希望もなく、豚小屋のような汚い家に引きこもって、因習に固執して改めることをしらない。釜山の韓国人はみな長いキセルを抱えて、閑さえあれば喫煙している。また干した明太魚をむしり食べ、ニンニクや唐辛子といった刺激興奮のある食べ物を好んで貪食する姿は、本当に「未開」の本来の性質を現しているといえるだろうと述べた。この所感には、主に以下の三点から、「文明」を有している日本人が、「野蛮」で「未開」の韓国・韓国人に對する見下し、蔑視感情が見いだせるであろう。第一に、韓国人の生活は、奈良時代の生活に等しいといっても、

その精神性は奈良時代の日本人よりも劣っている。第二に、韓国人は呑気で生活を良くしようという希望もなく、汚い家に住み、閑さえあれば、タバコを嗜んで、最低限の労働しかしない怠惰な存在である。第三に、韓国人は刺激興奮のある食物を貪食し、野蛮である。山路愛山のような明治を代表する「進歩的」知識人であっても、「文明」のものさしでもって、韓国を「未開」の地、韓国人を「未開」の民と認識していたことがわかる。それが明治期における日本の知識人のごく一般的な韓国・韓国人認識であったといえよう。そして、裏返せば、そうした他者認識の現れこそ、「文明」のものさしという基準において、日本は「文明国」であるという強い自己認識（自意識）を支える根拠ともなっていたのである。

(3) 「韓国併合」と「文明」

福沢や山路のような明治の代表的知識人に見られた、「文明国」日本と「野蛮」ないしは「未開」の韓国といった対照的なイメージは、明治期の日本の知識人においては一般的な認識であったと思われる。こうした自他認識は、かつてのイギリスが清國に對してそうであったように、「文明国」日本の使命として、「野蛮国」・「未開

国」の韓国に対して、「文明」を賦与することが当然であるといった認識として現出することとなった。

一九一〇年八月、日本は韓国を併合し、本格的な植民地統治を開始するが、その際、発せられた「韓国併合に関する詔書」は、韓国統治の目的を以下のように示した。

朕、東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ、帝国ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ、又、常ニ韓国カ禍乱ノ淵源タルニ顧ミ、曩^昔ニ朕ノ政府ヲシテ韓国政府ト協定セシメ韓国ヲ帝国ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ経ルコト四年有余其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓国施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓国ノ現制ハ尙未ダ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼^{キョク}ノ念毎ニ国内ニ充溢^シシ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ為ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭然タルニ至レリ

朕ハ韓国皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓国ヲ挙テ日本帝国ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ応スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓国ヲ帝国ニ併

合スルコトナセリ

韓国皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕力^ス緩撫^フノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナ発達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈々^{イヨイヨ}其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ体シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムコトヲ期セヨ²⁴

日本政府は、「東洋の平和」を永遠に維持し、帝国日本の安全を保障するために、四年前から韓国を日本の保護国として、韓国における「争い」の根源を絶つてきた。この間、韓国の「施政改善」に努力して成果を上げてきたが、未だ韓国の治安保持を完全になしえていないとの空気が韓国内に溢れているので、韓国の人びとを安堵させ、公共の安寧を維持して民衆の福利を増進させるためには現制の革新が避けられない。それ故に、韓国を併合

することとした。今後は、韓国の人びとは明治天皇の下で、その康福を増進すべく、産業・貿易は顕著な発達を見ることであろう。「東洋の平和」もますますその基礎を堅くするであろう。そのために、天皇の命を受ける朝鮮総督を置いて、施設の緩急などの判断をさせて、民衆一般が長く平和の慶びに頼れるようにさせることとした旨を、詔書で述べている。

こうした大義名分を朝鮮で実現するために、朝鮮総督となった寺内正毅は総督府及び所属官署の課長以上の官吏に対し、次のような訓示を行った。

…不肖今次総督ノ大命ヲ拝スルニ膺リ暗黒ナル当地ヲシテ漸次文明ニ開導シ鮮民ヲシテ満足ヲ得セシムルコトハ実ニ至難ノ業ナリト考フ然シナカラ今日已ニ併合以後其ノ任ヲ辱フセルカ故ニ今後モ引続キ微力ノ限り竭シテ 聖恩ニ答フル所アラントス然リ而シテ其ノ職責ヲ完フセムニハ各其ノ政務ヲ分担スル所ノ諸君ノ協力ト補助ニ待タサルヘカラサルハ勿論ナルヲ以テ本日茲ニ諸君ヲ会シ親シク将来ノ施設ニ関シ一言訓示スル所アラムトス：⁽²⁵⁾

寺内は、総督に就任するにあたって、「暗黒」なる朝鮮を徐々に「文明」に開導し、朝鮮民衆に満足を得させることは非常に難しいことであるが、総督の任を務めるにあたっては、天皇の命に応えるためにも引き続き微力の限り職責を全うしなければならない。そのために、部下である課長以上の官吏の協力と補助を必要としていくと訓示した。この訓示から、寺内総督自身が「文明」のものさしで、朝鮮を「暗黒」と位置づけ、その開導の結果、朝鮮に「文明」をもたらすことを目指していたことがうかがえよう。こうした見方は、当該期において知識人とされた朝鮮総督府官僚・官吏の朝鮮観に大きく影響を与えたものと考えられる。

二、「文明」と「野蛮」の自他認識

— 近代日本の朝鮮人表象 —

(1) 総督府調査資料『朝鮮人の思想と性格』と村山智順

一九一〇年の「韓国併合」段階において、すでに朝鮮への「文明」の普及は、総督府の至上課題になっていたことは前述の通りであるが、総督府は「文明」を普及さ

せる対象、つまりは他者としての朝鮮人をどのように見ているのだろうか。朝鮮統治に際して、総督府は朝鮮についての多くの調査を重ねてきたが、総督府が統治構想を立案するための前提とする調査資料のなかに、朝鮮人の思想と性格についてまとめたものが存在する。朝鮮総督府編（編集担任者・村山智順嘱託）『²⁶朝鮮人の思想と性格』〔調査資料第二〇輯〕一九二七年二月）がそれである。²⁶この調査資料は、総督府が「朝鮮を理解するには朝鮮人の思想並にその性格を窺うことが最も必要な条件である」とし、当時の朝鮮人が各方面の新聞・雑誌や研究などにどのように描かれたのかを収集し並べたものである。「序」でも「雑然と寄せ集めたものに過ぎない」とされており、本格的な調査研究のために準備されたものであった。²⁷

当該資料の編集を担当した村山智順は、一八六一年に新潟県刈羽郡に生まれた。幼少期に母を亡くし、日蓮宗妙広寺に入り、住職村山智全の薫陶を受けて成長した。旧制第一高等学校から東京帝国大学に入學し、文学部哲学科を二八歳で卒業した。卒業論文の題目は「日本国民性の発達」であった。一九一九年七月に朝鮮総督府嘱託となり、秋葉隆京城帝国大学助教として朝鮮を研

究することとなった。総督府嘱託としては、庶民の衣食住、鬼神や風水にかかわる民俗宗教、伝統的なあそびなどを研究し、数多くの調査報告書を作成した。一九四一年に離鮮して帰国し、妙広寺住職となり、学界・言論界から離れた。一九六八年に死去している。²⁸野村伸一によれば、村山は、朝鮮人の「伝統への親しみ」、「生活的意欲即ちよりよき生活を求めむとする願望」は改変することの出来ないものであり、いたずらに「固陋迷信」として排斥、弾圧すれば、その意欲は消沈し、あるいは祭祀以外の一層迷信的な方向へ向かうかもしれないとの憂慮を持っていた。総督府嘱託であった村山にとっての仕事は総督府の治世のために調査報告書を作ることで、その叙述の方向は自ずと制約を受けざるを得なかったという。²⁹しかし、そのほか村山が残した多数の調査資料³⁰を見ても、そうした制約下にあっても、出来る限り村山自身が「客観的」に調査資料を編集しようとしたことは疑いはないであろう。南次郎総督の下で学務局長を務めた塩原時三郎による皇民化政策の強行推進路線こそ、村山が一九四一年に総督府を去ることとした決定的理由となつたとする見解もある。³¹時代の空気により、調査研究への制約が厳しくなると、村山は総督府嘱託を辞し、故郷の

新潟に帰り、学界・言論界から離れることとなった。こうしたことからも、総督府の立場からの調査という制約下にあつても、できる限り「客観的」であろうとする研究者・編集担任者としての村山の基本姿勢が見て取れよう。

(2) 総督府調査資料『朝鮮人の思想と性格』にみる朝鮮人の性格

当該資料の構成は、第一編「朝鮮人の概観」、第二編「朝鮮人の性情」、第三編「朝鮮の社会傾向」、第四編「政治及経済思想」、第五編「信仰思想」、第六編「朝鮮の文化思想」、第七編「朝鮮の文芸思想」の全七編となっている。

当該資料を読み進めていく上で、重要なポイントが三点ほどあると考えられる。

第一に、この調査資料が^④(マル秘)とされていることである。つまり、調査資料を利用してほしい対象が、事実上、総督府関係者に限定されていることに留意しておきたい。

第二に、当該資料に集められた朝鮮人観すべてが日本人、つまり「内地人」によるものではないということに

留意しておきたい。外国人や朝鮮人自身の認識も掲載されている。また、「某」と称され、「内地人」なのか、朝鮮人なのか判然としないものも含まれている。こうしたことに注意して読み進める必要がある。

第三に、当該資料の構成及び資料掲載順序に注目する必要がある。総督府文書課長が序文で「雑然と寄せ集めたものに過ぎない」といい、編集担任者である村山ができる限り「客観的」であろうとする資料配置を考えたとしても、その方向性は、たとえ無意識のうちであつても、調査資料の構成や資料配置に現出するであろうと考えるためである。

そして、それこそ、村山が感じていたある種の制約、すなわち、総督府による朝鮮統治やその構想に資するための調査資料という位置づけにあると考えられよう。

以上の三点を意識しながら、当該資料の概要を、主に朝鮮人の性格やそのイメージを整理している第一編と第二編に絞って見ていくことにしたい。

(A) 朝鮮人の概観

第一編は「朝鮮人の概観」と題され、「一、朝鮮人の誇り」、「二、ロシア人の観た朝鮮人」、「三、米国観光団

の朝鮮人観」、「四、朝鮮人の健康」、「五、シベリアに於ける朝鮮労働者」、「六、日本内地に於ける鮮勞」、「七、朝鮮人思想の傾向」の七項目から構成されている。

(a) 朝鮮人の誇り

まず、「朝鮮人の誇り」では、一九二四年、朝鮮語雑誌『開闢』で描かれた朝鮮人観が紹介されている。『開闢』は「文化政治」下、一九二〇年に天道教徒によって創刊され、一九二〇年代の文化・啓蒙活動に大きな役割を果たした月刊総合雑誌である。³³そこには朝鮮人自らによる朝鮮人観が以下の七点にわたって並べられている。

第一に、朝鮮日報社社長の李商在による「淳良性」、飾り気がなく素直で善良であることを誇りとしていること。第二に、東亜日報社の韓偉健による「残忍性がないことは東洋三國中第一に位置するようである」との評価。第三に、弁護士金瓚泳による「朝鮮民族は将来世界の模範とならう」との言。第四に、医師金容採が健康上から見た朝鮮人の優越点。第五に、普成高等普通学校の張錫哲による淳厚にして善良な朝鮮人の人心について。第六に、槿花学院長金美里士女史の「女子の貞操は世人に其比なし」との言。第七に、時代日報社洪命熹による「わ

が誇るべきものは正音文字」との言である。

ここに掲載された資料からは、朝鮮人論者自身の認識のなかにも、「文明」か「野蛮」かという価値基準があるということがわかる。

例えば、弁護士金瓚泳は、「今日の強き民族は将来の世界から見れば罪惡の民族であり、今日の文明民族は将来の世界では等しく野蛮の民族に他ならない、然るに吾朝鮮人は他のように強からず文明ならず（所謂現代文明）随つて罪惡もなく野蛮的行事もない、その純潔なること実に清風明月の如く、人類中神仙の氣風を有する民族である」と述べ、一般的な「文明」と「野蛮」というものさしの解釈を逆転させて理解することで、朝鮮人を「将来世界の模範」となる「平和の民族」であるとの主張を展開した。³⁴

また、医師金容採は「或一部の人々は未開の民族程眼力と歯牙が丈夫で腸胃が健全であるから朝鮮人の眼力が強く、歯牙の丈夫にして伝染病に対する抵抗力強きは、つまり朝鮮人が未開な為であると云ふ。が決してさうではない。今動物に比して云へば、虎や獅子の歯牙は他の動物より強いが、それだからとて誰か人は虎や獅子より劣等な動物と云ふか。…中略…文明となる程人類の體質

が弱くなり病も多くなることは事実であるが、元来健康な体質ならば文明になつたと云ふので不自然に弱くなる訳もない。文明となれば医学が発達し体育が発達して、却つて一層健康となる筈である。要するに吾等朝鮮人は上記三ヶ所が他の国民よりも優秀なることを知るのである」として、世間に流布した「文明」のものさしによる「未開」ほど「歯牙」等が強いという健康観を否定した。⁽³⁵⁾ これらは知識人の代表といつていい弁護士や医師が「文明」と「野蛮」ないしは「未開」というものさしによる文明観の評価を否定することで「朝鮮人の誇り」を主張する論証がなされたものである。それは「文明」のものさし自体が、極めて恣意的に朝鮮人を「未開」、「野蛮」と位置づけ、その「改造」ないし「改新」「改革」による「文明化」、「近代化」を必要とすることに對する反論であつた。しかし一方で、当時の朝鮮社会において、「文明」のものさしが非常に影響力をもつた価値基準、言説として機能していたことも反証していた。

(b) ロシア人・アメリカ人の朝鮮人観

次に紹介されている資料「ロシア人の観た朝鮮人」は一九一〇年ごろ、「韓国併合」前後の帝政ロシアの枢要

な地位にあるロシア人の極東における黄色人種の調査手記である。そこに表れたロシア人の朝鮮人観として、(イ) 稼ぎ金の大部分を消費し、露西亞人服装を買おうとするハイカラの朝鮮人、(ロ) 朝鮮人は黄色人種中性質最も柔弱で、強者と見れば直ぐに降服する事大主義者、無抵抗主義者であつて、ロシアに移住した朝鮮人は直ぐにロシア風になる傾向が著しいという点、(ハ) 極東ロシア領の朝鮮人はロシア政府の対朝鮮人政策に対する不平不満であつたという点、(ニ) 朝鮮人のロシア正教に對する態度が全く形式的あることが挙げられている。⁽³⁶⁾

また、「シベリアに於ける朝鮮労働者」の項目においては、一九一二年のロシアの特命黒龍踏査隊の報告書「沿黒龍地方に於ける支那人、朝鮮人及び日本人」の抄録が紹介されており、そこに描かれるシベリア砂金場における朝鮮人の姿も右記のイメージとほぼ同様のものとなつている。ただ、「…前略…朝鮮人は労働者としての能力は露人に比べる時は二五乃至三〇パーセント能率が高い。酒は飲むことは飲むが、酔つても乱暴はやらない。博奕も打たねば阿片も吸はない。同国人に對しても外国人に對しても強盜殺人の目的を以て危害を加へるやうなことは、支那人と違つて殆んど無い。普通の泥棒は朝鮮

人の間には余りに見受けられないが然し秘密に金塊を窃取隠匿することは頗る巧妙である。朝鮮人は騒ぐことを好まない」という朝鮮人労働者の柔和かつ被同化性の高い勤勉な姿と同時に、巧妙な金塊の窃取隠匿という側面に言及している³⁸。こうした性向が朝鮮人のロシア領への土着を忌避するロシア中央政府の政策に反映し、これが唯一の朝鮮人への否定的な方面であるとしている³⁹。中国人との比較は「文明」のものさしにおける黄色人種中の朝鮮人の位置づけを示しているといえよう。

なお、「米国観光団の朝鮮人観」の項目では、一九二四年三月に来鮮したクラークスという米国の会社の社員の一「朝鮮人の懶惰的民族なることなり彼等は動物の如く路上に起臥するあり又市中を徒に徘徊し何等為すことなく遊びつつあるもの多し斯くては亡ぶるも当然なり」という感想が挙げられた。

アメリカ人、ロシア人といった「文明国」の国民が、当時の朝鮮ないしは朝鮮人をどう見ていたのかの一端を示す資料である。「文明」の「野蛮」へのまなざし、つまり当時の朝鮮ないしは朝鮮人への不満や「非文明」への軽蔑が率直に示されていると思われる。

(C) 在日朝鮮人イメージ

「日本内地に於ける鮮労」の項目においては、一九二〇年代におけるさまざまな在日朝鮮人観が紹介されている。まずは、『大阪毎日』記者金学秀による「内地鮮労視察記」に描かれる在日朝鮮人労働者像である。渡航動機は、「内地」に行つた友達らの勧めで、「内地」に行けば、仕事も幾らでもあり、金も儲かるという漠然とした考えから、「内地」見物のつもりで、再渡航、「内地」で苦勞したあげく、これでは堪らぬと思つて、朝鮮半島に返つてみても、余りに暇で単調な生活に耐え切れず、つい思い直して又、「内地」に出掛けるとの説明がなされる⁴⁰。この動機に「内地」に出かけるときも、「国に帰る」時間も、嬉しいと感じた朝鮮人女性の言を添えている。しかし、言語不通の弊により、「鮮ゴロ」の餌となるケース、意思の疎通が行かずに喧嘩争いをなすケースがあつたという⁴²。また、「内地」⁴³に來た朝鮮人は凡て内地人の姓を持つていたという。そして、独身者は六畳におよそ八人づつを例とする蒸し蒸しした部屋のなかで、虱に喰われながら、暑苦しい思いをして寝るよりも、むしろ涼しくて心持ちの良い戸外で露宿するようになるという⁴⁴。

教育程度については、在阪一八、一九一名に対する調

查で「…前略：男女の比を見るに、女の数は約二割弱即ち、男一〇〇に対して女二〇の割合なり、男子の約半数は無学にして、女子は約九割が無学なり、大阪中央職業紹介所調査に依れば紹介所を潜つた者の内、其七割九分までが何処とも知れず流れ去って行方知れずになると」紹介された。⁴⁵

『大阪朝日新聞』（一九二三年五月三〇日）の「鮮労と内鮮融和」という記事においてもほぼ同様の朝鮮人イメージが掲載された。要約すれば、次の通りである。朝鮮人労働者は「内地」にさえ渡れば、幾らでも金儲けの壺が掴めるように思つて、着の身着のまま漫然とやってくる。その期待は当然裏切られるが、そこに無理解な自暴自棄があつて、家賃米代の貸し倒しや性犯罪などの不逞な振る舞いが行われることにもなるだろう。こうした状況の中、「内鮮融和」の希望などは到底実現することもなく、日本人と朝鮮人の感情は渡航朝鮮人が増加すればするほど、ますます関係が悪く、疎遠になって、「内地」と朝鮮半島の交通の自由を呪う者も生じてくるにちがいない。朝鮮人の衛生思想は極めて幼稚低級で、天然痘も問題にされない状態なので、多数の「下層」朝鮮労働者の流入は、「内地人」の健康に危険を感じさせ

ずには居られない。⁴⁶

こうした新聞各紙の朝鮮人労働者に関する報道が、当時の日本社会における在日朝鮮人イメージを形成する大きな要因として存在していたと考えられよう。

しかし、「下層」と位置づけられた朝鮮人労働者の側にも、困窮する事情があつたことを指摘する資料も掲載されている。「在内地鮮労困窮の原因」として、第一に、朝鮮人労働者は土工などの臨時雇であり、仕事の完成で失職すること、第二に、朝鮮人労働者は忍耐力に乏しく、少しでもよい賃銀を追い求めて転々とする事、第三に、民族的な嫌悪の感情や不信用などの理由で、「内地」人で朝鮮人の雇傭を忌避する者が少なからずあること、第四に、朝鮮人労働者の賃金が「内地」人に比べて、一割から六割、平均二割の低率であるため、衣食住の生活費が低い水準にあること、第五に、収入があればすぐに休んで徒食し、酒食に散在するので、多少の貯金がある者はほとんどいないこと、第六に、多少貯金の余裕がある者は他の寄食者（同族）に依存されて食い倒されてしまうことが挙げられている。⁴⁷

要は、民族的な嫌悪が誘発する朝鮮人労働者の賃銀水準の低さに加えて、朝鮮人の性向が、在日朝鮮人労働者

の困窮の原因とされている。こうした朝鮮人労働者の生活状況のマスコミによる報道が、当時の日本社会における朝鮮人イメージを形成していくこととなった。

さらに「内地に居る鮮人労働者」との項目が続き、総督府嘱託であった善生永助⁽⁴⁸⁾による在日朝鮮人労働者認識が紹介されている。

善生は、「内地に居る鮮人労働者にはまだ政治的思想などは発達して居ないやうである。…中略…何とか彼とか騒ぐものは学生か又は無頼の徒であつて純粹の労働者は之等には無関心である。騒ぐ者同志の間にはいつも争ひが絶えないので大した勢力とならん。労働者で貯蓄をするものは皆無という訳ではないが極めて少数で、一千人中四十名にすぎない程である。之等労働者に通じての癖は如何に下級のものでも帽子と靴には多額の金を惜し気なく出すことであり、又小さな鏡を懐中にして居ないものはない位、体裁に留意することである」との印象を視察談として残している。⁽⁴⁹⁾先に述べた朝鮮人労働者イメージに加え、政治的思想の「未発達」、帽子と靴への投資熱が述べられていることがその特徴と言える。

(d) 朝鮮人の思想傾向

最後に、或る中樞院参議(朝鮮人上層)が分析した「朝鮮人思想の傾向」が第一編「朝鮮人の概観」を締めくくっているが、ここでは、朝鮮人の政治思想の憂慮が表明されている。朝鮮人を政治的方面から観察すると、

(イ) 独立主義、(ロ) 自治主義、(ハ) ガンジー主義、
(ニ) 内地延長主義、一、社会的方面より観察、(イ) 無産主義、(ロ) 無政府主義、(ハ) 穩健なる社会改良主義、(ニ) 衝平運動といった思想を有しているが、そのうち、二三を除く外は殆ど今や最も憂うべき危機に瀕したるを自ら認められるという。⁵⁰こうした思想が後に国家中堅を担うべき朝鮮青年の間に最も広がっていて、かつてあつた「美しき涙ぐましい倫理道德」は見いだせないようになつて、「自由放縦憚りなく浮華輕佻に流れ」、親の教えをものともせず、年長者の戒めを斥くようになつて、虚無主義を喜んで声に唱えるようになり、そうした結果、私たちの目に映るようになってきたのは「惟滅亡のみ」である。「新旧両思想の長所を取り調和中庸させて挽回策をとる」ことが「現下朝鮮統治の当局者として何よりも先に手を着けねば成らぬものである」と朝鮮人の思想傾向の「善導」の必要性を説く資料を最後に配置

して、第一編を閉じている。⁽⁵⁾

(B) 第一編掲載資料の配列の分析

在日朝鮮人労働者の分析では、従来の研究でも指摘されてきた通り、経済的要因に伴う在日朝鮮人労働者の困窮する生活状況がマスコミの報道や人びとの口コミによって、日本社会に在日朝鮮人イメージを形成することになった経過を理解できよう。また、当時の日本社会の朝鮮人イメージが極めてネガティブなものであったことも窺える。しかし、それだけで、当該資料が日本社会あるいは日本人知識人による朝鮮人蔑視観を象徴するものであると結論づけるのは尚早であろう。なぜなら、当該資料には、日本人だけでなく、アメリカやロシアの朝鮮人認識に加えて、当事者である朝鮮人知識層の自己認識も含まれているからである。

そこで考えたいのは、当該資料の第一編「朝鮮人の概観」で紹介された資料の配列・配置のあり方である。まず、(a) 朝鮮人知識層による自己認識が「誇り」として紹介され、次に、(b) ロシア人やアメリカ人といった西洋列強の上層による朝鮮人イメージが紹介される。西洋列強上層による朝鮮人イメージも一部朝鮮人に対す

る賞賛はあるものの、基本的には、西洋の「文明」に比してネガティブな評価、つまりは「半開」ないしは「野蛮」という位置づけがなされていたものと言えよう。こうして、西洋の「文明」の朝鮮人评价を示した後に、(c) 在日朝鮮人労働者イメージを朝鮮人上層を含めた日本人に語らせる資料の配置を行っている。そして、朝鮮人の政治思想の「未発達」を印象づける総督府囑託の主張の後に、(d) 朝鮮人上層かつ統治者側に位置する中樞院参議が現下朝鮮青年の思想の憂うべき危機的状況の改善・改革を訴える資料を配置して、「朝鮮人の概観」をまとめている。第一編を通じて見えてくるのは、西洋「文明」や日本の朝鮮人認識を次々と配置すると同時に、朝鮮人記者や中樞院参議といった知識人の朝鮮人イメージを配置することで、冒頭(a)の西洋や日本が「文明」なのではなく、朝鮮人こそ「文明」を有する「誇るべき民族」であるという朝鮮人知識人層の自己認識——それはつまり、「文明」のものさしによる「野蛮」評価への反論でもあったが——を否定する資料配列の効果である。

もちろん、「文明」という価値は、前章で分析した通り、近代日本の官僚層や知識人層においては、近代国家

日本が追求すべきごくごく自然な価値と捉えられていたであろうから、それ自体を、村山が「ある種の制約」と捉えていたかどうかは不明である。

(3) 総督府調査資料『朝鮮人の思想と性格』第二編における資料の配列

そこで、資料の配列を意識しながら、ここでは、第二編「朝鮮人の性情」において、どのような朝鮮人イメージが配置されているかについて、分析しておくことになろう。

第二編は、朝鮮人の「一般的性格」について、学者等による「二三の朝鮮人性格観」、高橋亨博士による「朝鮮人の特性」から構成されている。

(A) 一般的性格

第一に、朝鮮人の「一般的性格」についてであるが、二〇余りの性格が配置されている。

(イ) 放縱、奢侈、浪費、射倖は朝鮮人大部分の性癖である。随て勤儉努力の風を欠く、故に亀裂問題に乗じて生活せんとするも亦無理はない。然しこれ彼等を亡ぼす所以で又彼等を馳て思想の悪化に走らしめんとする欠

陥であるとする『朝鮮毎日』一九二四年一月一四日の記事によるものである。⁵³⁾

(ロ) 高橋亨博士による「表面的、形式的を好む」との性格である。儒教を国教として国運の隆盛を得ようとした際も、表面の礼儀のみに拘泥するなど表面的形式的で仁義忠孝など内面の研究をゆるがせにしたことを根拠とした。⁵⁴⁾

(ハ) 一般の朝鮮人は附和雷同の性格を有する民族である。主義なく定見なく感情に激する悪癖あるからである。朝鮮王朝の失政もこうした附和雷同の性格の結果として、貧窮と欠乏、政治の腐敗と無秩序、混乱、迫害、圧政があつて、今日に至つたとする『朝鮮毎日』一九二四年一月一四日の記事によるものである。⁵⁵⁾

その他、(ニ) 模倣性に富む、(ホ) 無元氣、(ヘ) 怯懦⁵⁶⁾、灰色、保身術に、(ト) 利己的判断をするといった性格が続く。

総督府官僚であつた丸山鶴吉は、朝鮮人は(チ) 真剣味のない事をその性格としてあげている。丸山は「…前略：朝鮮人は陰謀に巧みである、言葉に巧みである、計画も巧みであります。けれども実力が乏しい。且つ真剣味が足らないで直ぐ党派争ひが起り、名誉心のことと争

ひが起りまして、決して纏つた仕事が出来ないのが現在の朝鮮人であります、即ち本当の真剣味が乏しいのであります。私共多くの朝鮮人に接し交わりを重ねましたが、朝鮮人に最も欠けて居るのは此真剣味であります」と論じた。⁽⁵⁸⁾ 続いて、同様の趣旨となる(リ)朝鮮人の真剣味に乏しい、(ヌ) 感激性に乏しいとの某による指摘が続く。

裁判官水野重功⁽⁵⁹⁾は、朝鮮人は(ル) 依頼心が大きく、特に有識修学の者は恩義感が薄弱であると主張した。⁽⁶⁰⁾ これは同族中に成功者が出ると、遠縁の者まで来て、成功者の産を尽くさせてしまうという、第一編でも指摘されていた性格であつた。

総督府官僚も務めた小松緑は、朝鮮人に(ヲ) 独立心なしとして、「朝鮮の独立は国民性に合致しない。朝鮮の三千年来の歴史を繙くに、何れの時代に於ても、何れかの大国に従ふという事が一貫した事実である。それが朝鮮人の固い思想となつて来たので、純然たる独立を維持する能力を欠いてゐたのである」と指摘する。⁽⁶¹⁾ いわゆる事大主義である。

さらに、(ワ) 感覚の鈍さ(鈍感さ)が真剣味のない原因である。一般に中以下の朝鮮人は鈍感なように見え

る、馬鹿に辛いものを平気で喰ひ、何かけがでもした時、声は大きくするが、上つ調子で真から泣いて居るように見えない。この痛感のないのは生理的感覚が鋭敏でないことに基くのではなからうか。生理的感覚の鈍さから感じ方の鈍さが来るのではないかしら。何につけても真剣味を欠くのも亦この感じ方の鈍さから生ずるのではなからうかと分析した論者もあつた。⁽⁶²⁾

平安北道の熙川方法院出張所主任は、書類不備を直さず三度提出したため、不受理にしたところ、「内地人のは速かに受理しながら鮮人のは受附けない」と不平一語するといった経験から、(カ) 痛感せざれば還らず(不平の根基)との性格を指摘した。⁽⁶³⁾

総督府の杉浦武雄は、「…中略…吾々が自ら「ヨボ」と呼ばれた時、若くは同胞が「ヨボ」と呼ばれるのを聞く時、実に情けないことであるが、憤慨の心よりも先づより多くの悲哀の心持が起こる。自らの地位を諦め切つた人の心持ではないか。此の心持は内地人の何人も想像も出来ぬところである」という性格を指摘した。⁽⁶⁴⁾

以下、(タ) 各道人の心性(適性)や(レ) 鮮人の雄弁、(ツ) 在米鮮人の性格と続き、最後に、(ツ) 自殺、(ネ) 変死者という項目で、「韓人は精神の苦痛を感じず

ること甚しきことあるに遭へば縊死又は溺死を遂げ其生命を軽んずること局外者の聞くも殆んど信ずる能はざる所にして之に興ふるに瑣細なる不快侮辱の言語其他毫も介意に働せざる事情を以てするも猶ほ容易に之をして自殺せしむるに足るなり」との性格を指摘した。⁶⁵

ここで挙げられている二〇あまりの朝鮮人の「一般的性格」は、すべてネガティブな評価となっている。総督府官吏らが考える朝鮮人が克服すべき性格という趣旨ともとれよう。

(B) 二三の朝鮮人性格観

次に配置されている資料は、杉市耶平『長白山より見たる朝鮮及朝鮮人』の抄録で、「朝鮮人の性格」である。杉市は、朝鮮人の基本性格を「韓族は南方暖国の種で平和を愛し、仏教及儒道の教化を浴したので文を尚び武を卑むの風があり、概して財物に執着するも支那人の如く吝かならず、清潔な点に於ても支那人の比ではない」とした。⁶⁶ここでは、中国人と比較して、朝鮮人が優れている点を指摘した。さらに、「事大性、面従腹背、陰謀性、向上の前途」があり、「朝鮮人は向上進歩の見込なき劣等民族と云ふに、決して然うではない、黄色中に於て決

して劣つて居ない、寧ろ優秀の素質を有つて居る」と評価する。⁶⁷

しかし、一九二〇年代の朝鮮は「墮落した」とされており、その理由として(1) 地理的国情、(2) 悪政の結果が挙げられる。更に「：中略：悪政の手法は支那である。：中略：朝鮮は議論の国、利巧な人である。：中略：近時朝鮮人中には独立を論じ独立てふ虚栄心から盲動するものがある、彼等は虚栄心から学問する、遊民とならないで何になれ得ようか」と、独立運動をけん制する言説が採用されている。⁶⁸

(C) 朝鮮人の特性

最後に配置された資料は、高橋亨博士による論考「朝鮮人」(学務局、大正一〇年一月抄録第二各論第三余論を合わせたもの)であり、一〇の特性を指摘している。それは、思想の固著、従属即事大主義、形式主義非審美的、文弱、党派心、公私混淆、寛雍、鷹揚、従順、樂天である。以上の一〇の特性のなかで、「思想の固著と従属即事大主義とは恐らく朝鮮人の最根本的なる二大特性ならん。：中略：(これに加えて)山口註)形式主義非審美的、文弱、党派心、公私混淆の六特性は日本の統治

の年積もるに従ひ漸次消散せしめらるべき約束の下に在るものなり」と高橋はまとめる⁽⁶⁹⁾。

高橋はこう続ける。朝鮮人の特性の「暗黒面」だけを見て、「劣等民族」として軽蔑し賤遇して顧みざる者があるが、このような狭く同情なき心がけでは朝鮮人の同化は成就しない。朝鮮にいる日本人は、朝鮮人がかつての悪政の結果、養成された暗い性質を「善政」と「優秀民族」の感化によって、洗い除いて日本人に同化すると同時に、民族的に向上させる義務と自覚をするべきである。殊に官吏の者、言論者の流れはそうであるとする。

若し日本人がこの心がけを持つことができなければ、日本人には植民地経営の能力がないものと言われても仕方がない、と⁽⁷⁰⁾。

さらに、高橋は、寛雍・鷹揚、従順、楽天の三つは朝鮮人の美質とみなすべきで、上記、朝鮮人の欠陥短所たる性質を洗い除くと同時にこれらの美質を保存することは勸奨すべきであるとした。しかし、高橋は上記六つの特性が洗い除かれる前に、これら三つの美質が失われてしまうのではないかと恐れた。「文明」は人間の生活欲を昂進させるために、樂觀主義は維持し難い。儒教の權威が衰えれば、社会の秩序は精彩を欠いて個人の権利思

想が盛んとなって、従順の徳は日に日に薄らぐ。こうして三つの美質は雲散霧消してしまうのではないかと憂慮する。こうした事情はあるにせよ、高橋は、必ず最後には、朝鮮人は日本人に同化することを信じたいという。

日本人にとつても、朝鮮人にとつても、同化することが利益となる。日本人の朝鮮人に対する感情から見れば、もともと文明国（西洋諸国）の何者よりも人種的差別感を懐くことが少なく、他人種である西洋人の朝鮮人は、「野蛮蒙昧」で、牛馬とも遠からざる人種であると極めて侮蔑的な西洋人の一般的感情とは異なるものであると論じた⁽⁷¹⁾。

(D) 第二編掲載資料の配列の分析

第二編の掲載資料の配列を追っていくと、第一編とは異なり、資料の羅列といった性格よりも寧ろ、ある種の物語（論理性）を見出し得るように窺える。多くのネガティブな「朝鮮人の一般的性格」を提示した後に、「二三の朝鮮人性格観」において、朝鮮人のポジティブな性格を示すと同時に、それは中国人よりも優れて「文明」の側に位置していることを強調する。さらに、「朝鮮人の特性」において、朝鮮人の六つのネガティブな特性を

洗い除き、三つのポジティブな美質を生かし、日本人への「同化」を果たすところ、朝鮮人の利益となり、民族性を向上させることとなる。そして、日本人はそうした朝鮮人の「同化」を促す役割と義務を自覚すべきである。同じ「文明」を担う存在であれ、異人種の西洋「文明国」は極度に朝鮮人を「野蛮」として軽蔑視する一般的な感情を有しており、朝鮮を「文明」化するにふさわしくない。それにふさわしいのは、まさしく人種的に同じく、西洋と比して、朝鮮に差別感を懐くことが少ない「文明国」日本であるとの論理展開が資料の配置から読み取れるのである。

第一編における「客観的」かつ「羅列的」とされる資料配置は、朝鮮人知識人の「文明」批判を否定し、朝鮮を、西洋の「文明」に比して「半開」ないしは「野蛮」との位置づけた。こうした第一編から、さらに踏み込んで、第二編では、「文明」を朝鮮に与えるのは、西洋の「文明国」ではなく、日本であるという論理を、三つの資料の配置によって、示したものと考えられる。第二編の資料配置を見ると、「客観的」かつ「網羅的」というよりは寧ろ、そこには、朝鮮人の日本人への「同化」が望ましい統治政策であるとの総督府の考えが、明示され

ていると受け止められよう。当該資料を「読み手」がたとえ無意識に参考にしたとしても、その論理に気づかないことはないであろう。

もちろん、当該資料には、「本輯は主として朝鮮人の思想並にその性格を調査研究するの資料とする考で、各種の方面から見た朝鮮人の思想並に性格を雑然と寄せ集めたものに過ぎない」と官房文書課長名で明記されている⁽⁷²⁾。また、前節(1)で分析した通り、できる限り、資料に「客観的」であろうとする研究者・編集担当者としての村山の基本姿勢からも、恣意的な資料配置がなされたとの断定はできない。ただ、当該資料が総督府による朝鮮統治やその構想に資するための調査資料という位置づけが、村山智順に「ある種の制約」——それは「文明」を朝鮮に普及するという「総督府の治世のため」であったであろう——を感じさせ、当該資料の配置に影響を与えていた可能性は、第二編まで見てくると、かなり高く、それはもはや無意識ともいえないレベルであると言える。

当該資料に見られる朝鮮人の性格を見ていくと、従来から指摘されてきた朝鮮人に対するネガティブなイメージに力点が置かれていると言ってよい。しかし、ここで

明らかにしたいことは、この時期の総督府官吏の朝鮮に對するネガティブなイメージが示されているということではない。当該資料を参考にすることで、総督府の官僚・官吏たちは、自らがすでに獲得していた「文明」というものさしが、朝鮮統治においても当然の価値基準として適用されるものであることを知り、そして、他人種への蔑視が甚だしいとした「西洋型」ではないとされる、「日本型」の「文明」のものさしを獲得した。つまりは、日本が「文明」を与えることで、「改造」すべき対象、「善導」すべき対象としての朝鮮社会そして朝鮮人の「野蛮」を当該資料で改めて確認することとなったということがある。

村山がさまざまな角度から編集した朝鮮人イメージの羅列は、総体として、「日本人」によるネガティブな「朝鮮人の性格」を表象しており、それは、総督府にとつて、「文明」を与え導く対象として都合のよい、「未開」あるいは「野蛮」な朝鮮人イメージのステレオタイプ化であったといえよう。

おわりに

本論では、朝鮮総督府編（編集担任者：村山智順嘱

託）『^⑧朝鮮人の思想と性格』（調査資料第二〇輯）一九二七年二月）掲載の資料の配列などを分析することで、近代日本の「自他認識」が「文明」のものさしを価値基準として成立していたことを明らかにしてきた。

近代日本の「他者表象」としての朝鮮社会並びに朝鮮人イメージは「非文明」「野蛮」「未開」といったものであった。それは裏返せば、「文明国」日本こそが「野蛮」で「未開」である朝鮮社会や朝鮮人を「善導」すべき存在であるといった「自己認識」を意味した。当該資料を編集した村山智順自身がそうしたことを意識していたかは不明であるが、無意識のうちに内在化させていた可能性はある。

こうした「文明」と「野蛮」の自他認識は、一九二〇年代の日本の植民地官僚・官吏にとつては、身につけるべき当然の認識であったともいえる。例えば、農商務省官吏が朝鮮の全州に赴任した際に「全州。出迎人、庁を挙げて来る。今日は休日ではない。国家の事務を執るべき日である。而して此の新造の地に於ては事務に野を拓く如くにあるべきはずである。野暮なことをいう様だが、小吏の送迎などに傾倒して国家の為に済むことであろうか」との所感を残している。^⑨一九一七年に出版されたも

のであるが、そこには植民地官吏の勤勉で効率的な「事務」によって「野を拓く」といった朝鮮へのまなざしが読み取れる。それは「野蛮」な朝鮮を「善導」するとの指導者意識であった。「文明」のものさしという価値基準には、当該期の日本が目指した「近代化」「合理化」といった概念や価値観が含まれており、一九一〇年代後半にすでに植民地官吏の所感に現れていた。そう考えると、一九二七年の段階において発刊された当該資料のなかに、「文明」と「野蛮」の自己認識を発見したことは別段特別視することではなく、そこに現れた「野蛮」な朝鮮を「文明国」日本が「善導」するといった認識も、すでに「韓国併合」時に、寺内正毅総督の課長以上の総督府官吏への「訓示」に示された朝鮮統治の目標が統治理念として定着した当然の認識であったと考えることが妥当なのであろう。さらに、第三―七編の分析もふまえて、検討を深める必要がある。

近代日本の「他者表象」、「自己認識」を考える際に、ここで扱った資料の配置などといった分析手法以外にもさまざまな方法が存在している。例えば「視覚表象としての近代建築物と集合的記憶」を明らかにする一事例として「朝鮮における神社」から接近する課題も考えてい

たが、それは今後の課題として他日に期したい。

こうした研究動向は、すでに「表象文化」論として、さまざまな研究成果を生み出している。列挙すれば、「視角表象と集合的記憶」(森村敏己「二〇〇六」)、「視角表象と戦争の記憶」(北原恵「二〇一四」)、宜野座菜央見「二〇一三」などは、女性身体や戦争に関連した表象文化を論じている。また、本論と関連する研究としては、映画を通じて帝国日本と植民地エリートあいだで行われた「国家」と「協力」をめぐる交渉と競合、そして「植民地メランコリアと協力」を論じた李英載の成果「二〇一三」が挙げられよう。⁷⁵⁾

また、近代日本の「他者表象」や「自己認識」は、近代に生きた日本人の心の中の民族序列、すなわち、近代日本の「帝国意識」⁷⁷⁾を示すものでもあり、そうした心理が近代日本の「帝国秩序」⁷⁸⁾を形成した一つの要素であったと考えられる。近代日本における「帝国秩序」を捉える際の前提として、日本型の「文明」のものさしを価値基準として植民地を「善導」すべき「野蛮」「未開」とする近代日本の「他者表象」や「自己認識」の存在を明確にしておくことは重要な課題であるといえよう。⁷⁹⁾

【註】

- (1) 荒野泰典ほか編『アジアのなかの日本史V自意識と相互理解』東京大学出版会、一九九三年)が初発的な試みと言えよう。
- (2) 特集「日本古代の「表象」と権力」(『歴史評論』六〇九号、二〇〇一年一月)一頁。
- (3) 特集「近代東アジアにおける自他認識」(同上六一四号、二〇〇一年六月)一頁。
- (4) 松田京子「帝国の視線―博覧会と異文化表象」(吉川弘文館、二〇〇四年)三〇九頁によれば、「他者表象」論の成果は、M・フーコー「狂気の歴史」・「監獄の誕生」・「性の歴史」などによって、「生活のさまざまな場面で発揮される「微細な権力」に着目し、それら諸権力の編成原理のあり方こそを、その時代の支配の様式として取り出し」、「学知による表象権力への問い」であったと整理する。そして「展示という技法による「異文化」表象の問題」も、第一に「帝国主義あるいは植民地主義と「異文化」表象の政治性」、第二に、「文化」表象全般に関わる議論(E・サイド「オリエンタリズム」批判)として、「日本型オリエンタリズム」を問うものとなっていると自らの研究を位置づけている。
- (5) 村田光二「外国人イメージの構造―調査データに基づく考察」(『森村敏己編』『視覚表象と集団的記憶―歴史・現在・戦争』旬報社、二〇〇六年)二〇三頁。引用部分に続けて、村田は「しかし私たちは、物理的な意味では眼前に存在しない対象にかんしても、心的
- (6) イメージを抱くことがある」(同右)と指摘している。
- (7) アジア学科共同研究計画「アジア諸地域における他者表象―関係と自己認識の位相」趣旨(二〇一四年五月一日)。
- (8) 詳しくは、西川長夫「日本型国民国家の形成―比較史的観点から」(『同他編』『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、一九九五年)を参照のこと。
- (9) 安丸良夫「文明化の経験―近代転換期の日本」(岩波書店、二〇〇七年)一三〇―一七頁参照。
- (10) なお、西川長夫の国民国家論に対しては、国民国家は国民を回収するばかりではなく、そこから自由となろうとする民衆の発見があるなどとした批判もある。
- (11) 刈部直「文明開化の時代」(『大津透ほか編』『岩波講座日本歴史一五巻近現代一』岩波書店、二〇一四年)を参照のこと。
- (12) 福沢の「文明開化」論については同右論文を参照。
- (13) 福沢論吉「文明論之概略」(一八七五年「富田正文ほか編」『福沢論吉選集第四巻』岩波書店、一九八一年、二〇〇二頁所収)。
- (14) 同右書二二頁。
- (15) 福沢論吉「脱亜論」(『時事新報』一八八五年三月一日)「同右」『福沢論吉選集第七巻』二二二―二二四頁所収)。
- (16) 月脚達彦「福沢論吉と朝鮮問題―「朝鮮改造論」の展開と蹉跌」(『東京大学出版会、二〇一〇年)一二―一五頁。同著「福沢論吉の朝鮮―日朝清関係のなかの

「脱亜」——(講談社、二〇一五年) 序章参照。「脱亜論」自体は、福澤が肩入れしていた、甲申政変という金玉均ら急進開化派のクーデターの失敗、つまりは「アジア改造論」の敗北を宣言したものにすぎないという見方が提示されている。

(16) 前掲『福沢諭吉選集第七巻』二二三頁所収。

(17) 前掲『福沢諭吉と朝鮮問題』一二一―一五頁及び前掲『福沢諭吉の朝鮮』序章参照。

(18) 前掲『福沢諭吉と朝鮮問題』一九五頁。

(19) 福沢諭吉「日清の戦争は文野の戦争なり」(『時事新報』一八九四年七月二十九日「歴史学研究会編『日本史料4近代』(岩波書店、一九九七年)二二一―二二二頁参照)。

(20) 「文明」の銃撃(『時事新報』一八九四年八月八日「同右書二二三頁」)。

(21) 「高度な文明を構築した国は、当然その恩恵を他の国々に分かち与えなければならぬ、逆に与えられた方は、その文明の低劣さと、いかなる有益な原理も実践」も生み出す力を欠如しているが故に、当然その恩恵を受けなければならない、というきわめて単純かつ一方的な発想に基づく「文明化の使命」という觀念(東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』ミネソタ書房、一九九六年)として説明される(木畑洋一「イギリスの帝国意識」同編『大英帝国と帝国意識』ミネソタ書房、一九九八年の八―一〇頁参照)。

(22) 当時、朝鮮王朝は、大韓帝国と称していたため、一

八八七年から一九一〇年までの朝鮮半島を「韓国」と記載することとする。なお、一九一〇年から一九四五年までの朝鮮半島は、当時、日本により呼称された「朝鮮」と記載することとする。

(23) 山路愛山「韓山紀行」(一九〇四年五月五日夜「山田昭次ほか編『近現代史のなかの日本と朝鮮』東京書籍、一九九一年)七九―八〇頁所収)。趙景達による「解説」も参照した。

(24) 「韓国併合ニ関スル詔書」(一九一〇年八月二二日「国立公文書館アジア歴史資料センターレファレンスコードA030208242001」)。

(25) 寺内正毅「併合後官制改正ニ付本府及所屬官署課長以上ニ対スル訓示」(一九一〇年一月三日「水野直樹編『朝鮮総督諭告・訓示集成I』緑蔭書房、二〇〇一年)一五頁所収)。

(26) 朝鮮総督府編(編集担任者・村山智順嘱託)『秘朝鮮人の思想と性格』(調査資料第二〇輯)一九二七年二月)。本論では、国立国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されている資料「書誌ID:000000778211」を利用した。以下、本文中で単に「当該資料」と省略する際は本調査資料を指すこととする。

(27) 朝鮮総督府官房文書課長「序」(同右資料)一頁。

(28) 野村伸一「村山智順」(館野哲編著『韓国・朝鮮と向き合った三六人の日本人』明石書店、二〇〇二年)一二〇頁を参照した。村山智順については、朝倉敏夫「村山智順師の謎」(国立民族学博物館『民博通信』七九号、

- 一九九七年二月)によって、解明されはじめたという。
- (29) 同右「村山智順」一一〇頁。
村山が総督府囑託時代に編集した調査資料としては、『朝鮮の服装』(一九二七年)、『朝鮮の習俗』(一九二八年)、『朝鮮の鬼神』(一九二九年)、『朝鮮の風水』(一九三一年)、『朝鮮の巫覡』(一九三二年)、『朝鮮の占トと預言』(一九三三年)、『朝鮮の類似宗教』(一九三五年)、『部落祭』(一九三七年)、『釈奠・祈雨・安宅』(一九三八年)、『朝鮮の郷土娯楽』(一九四一年)、『朝鮮市場の研究』(一九三〇年ごろ)などがある。
- (31) 吉村美香「村山智順の幻の肉声を求めて―朝鮮総督府関係者録音資料の一件(韓国・朝鮮文化研究会編『韓国朝鮮の文化と社会』一一号、二〇二二年一〇月)一八四頁。吉村氏は二〇二二年一月一九日の姜徳相氏インタビュー証言を根拠として推測する。
- (32) 前掲『朝鮮人の思想と性格』一〜六頁所収。
「『開闢』(韓国史事典編纂会・金容権編『朝鮮韓国近現代史事典【第四版】』日本評論社、二〇一五年)二四八頁。水野直樹「開闢」(伊藤亜人ほか監修『新版』韓国朝鮮を知る事典』平凡社、二〇一四年)五五頁。
- (34) 前掲『朝鮮人の思想と性格』二〜三頁。
(35) 同右四頁。
(36) 同右六〜一〇頁。
(37) 同右二六〜三一頁。
(38) 同右二九〜三〇頁。
(39) 同右。
- (40) 同右一〇〜一一頁。
(41) 同右三一頁。
(42) 同右三二頁。
(43) 同右。
(44) 同右三三頁。
(45) 『大阪毎日』大正二二年一月一〇日(同右三四頁所収)。
(46) 同右三五頁。こうした朝鮮人イメージが日本社会のベースとなっていたことが、この年の九月一日に起こった関東大震災下の朝鮮人虐殺事件の一要因となったと考えられよう。
(47) 同右三七〜三八頁。
(48) 善生永助は、総督府囑託として、村山智順と並んで、以下のような数多くの調査資料の編集担任を行った。『朝鮮の契』(一九二六年)、『朝鮮の小作慣習』(一九二七年)、『朝鮮の市場経済』(一九二九年)、『生活状態調査其一水原郡』(一九二九年)、『生活状態調査其二濟州島』(一九二九年)、『生活状態調査其三江陵郡』(一九三一年)、『生活状態調査其四平壤府』(一九三二年)、『生活状態調査其七慶州』(一九三四年)、『朝鮮の人口現象』(一九三五年)などを担当した。
- (49) 一九二四(大正一三)年の「善生永助視察談」(前掲『朝鮮人の思想と性格』三九頁)。
(50) 同右四二頁。
(51) 「中樞院参議某」による文章(同右四二〜四三頁所収)。

- (52) 高橋亨は朝鮮学研究者である。「韓国併合」後、朝鮮総督府嘱託として宗教調査や図書調査を行った。一九二〇年代になると、総督府視学官となり、京城帝国大学創立委員会幹事などを務めた。京城帝国大学教授として朝鮮語の正書法の制定にも関わった。戦後、天理大学教授となり、朝鮮学会を創設し、長く朝鮮学会を主導した。
- (53) 前掲『朝鮮人の思想と性格』四五頁。
- (54) 高橋亨「朝鮮宗教史に現れた信仰の特色」（前掲『朝鮮人の思想と性格』四五、四六頁所収）。
- (55) 『朝鮮毎日』一九二四年一〇月一四日（同右四六頁所収）。
- (56) 臆病でいくじのないこと。
- (57) 丸山鶴吉は警察・内務官僚として、一九一九年の三一運動後の朝鮮に赴任し、齋藤実総督の下で、一九二四年まで総督府警務局長を務めた。
- (58) 『同民』一四号掲載の丸山鶴吉の言（前掲『朝鮮人の思想と性格』四八頁所収）。
- (59) 「鶴岡に水野重慎の子として生れる。庄内藩の中老をつとめた水野藤弥の孫で、一四代当主。明治三五年（一九〇二）庄内中学校を卒業、金沢の旧制四高を経て東京帝国大学法科大学に入る。明治四〇年七月卒業して判事に任ぜられ、同年一月韓国京城に赴任、明治四三年（一九一〇）日韓併合条約により朝鮮が併合されると朝鮮総督府地方院判事となる。第二次世界大戦中は総督府高等法院検事局検事長をつとめた。昭和二

- 〇年（一九四五）終戦とともに帰国、郷里鶴岡に戻り弁護士をいとなんだ。（庄内人名辞典）http://sourairoku.com/01_sourai/07-2_mi/03-3_su/syounai_mizuno/mizuno_sigekatu.html 参照。
- (60) 一九二四年六月水野重功氏談（前掲『朝鮮人の思想と性格』四九、五〇頁所収）。
- (61) 『殖民』一九二四年五月掲載の小松緑の言（同右五一頁所収）。
- (62) 一九二五年三月某の言（同右五一頁所収）。
- (63) 一九二五年三月の平北熙川地方法院出張所主任談（同右五二頁所収）。
- (64) 「(ヨ) テルムの感じ」との項目中、「孫秉熙一味の中に「何故独立運動に参加したか」と云ふ問に対して「日本人が吾々を「ヨボ」と云ふのが癪にさわったからだ」と答えた者があった」との記載がある（杉浦武雄「朝鮮人の思想」『情報彙纂』第一の一〇九頁「同右五二、五三頁所収」）。
- (65) 『韓国誌』にある記述（同右五五頁所収）。
- (66) 杉市耶平「長白山より見たる朝鮮及朝鮮人」（大正一〇年八月）の抄録（同右五七頁所収）。
- (67) 同右六〇頁。
- (68) 同右。
- (69) 高橋亨「朝鮮人」（総督府学務局発行、大正一〇年一月抄録第二各論第三余論、同右六二、一一六頁所収）。本引用部分は同右一一三頁。
- (70) 同右一一三頁。

(71) 同右一三〇～一三五頁。

(72) 同右資料「序」二頁。

(73) 原象一郎『朝鮮への旅』(一九一七年)の一節である

(『樗村秀樹著作集第一巻朝鮮史と日本人』明石書店、一九九二年、二三一～二三二頁所収)。

(74) 前掲『視角表象と集合的記憶―歴史・現在・戦争―』

北原恵編著『アジアの女性身体はいかに描かれたか―視角表象と戦争の記憶―』(青弓社、二〇一三年)、野座葉央見『モダン・ライフと戦争―スクリーンの中の女性たち―』(吉川弘文館、二〇一三年)。

(75) 李英載『帝国日本の朝鮮映画―植民地メランコリアと協力―』(三元社、二〇一三年)。

(76) 「帝国」日本を同心円状に捉え、同じ「帝国臣民」

であっても、中央に近い存在から、日本人(大和民族)を一等民族、沖縄人・アイヌ人を二等民族、朝鮮人・台湾人を三等民族として民族の序列をつける思想を指す。小熊英二(『日本人』の境界)(新曜社、一九九八年)や遠藤正敬『近代日本の植民地統治における国籍と戸籍―満洲・朝鮮・台湾―』(明石書店、二〇一〇年)、同著『戸籍と国籍の近現代史―民族・血統・日本人―』(明石書店、二〇一三年)といった成果でも意識されている概念である。

(77) 「帝国意識」とは、「帝国主義の国民が帝国主義支配について共有していた意識」(木畑洋一)あるいは「なんらかの形で結果的に帝国支配を支援した人々の思考枠組み」(巨祐介)との定義がある。こうした「帝国意

識」は、「帝国支配を下から維持する機能とともに、帝

国主義国の国民のナショナル・アイデンティティを強化する役割を果たした」という(前掲『大英帝国と帝国意識―支配の深層を探る―』四頁)。木畑の定義の詳細については、同右四～五頁あるいは、同著『支配の代償―英帝国の崩壊と「帝国意識」』(東京大学出版会、一九八七年)二七五～二七六頁参照。

(78) 一般に、戦前期日本における国際現象をめぐる学知は、国際政治学が扱った主権国家間関係からなる「国際関係」に対して、植民政策学が扱った帝国内関係からなる「帝国秩序」の二系統の編成が取られていたという。そして、その双方を媒介する論理の連関性を重視する方法論によって、「帝国秩序」論を位置づけるべきとの主張がある(酒井哲哉『「帝国秩序」と「国際秩序」―植民地政策学における媒介の論理―』同編『帝国』日本の学知第一巻「帝国」編成の系譜』岩波書店、二〇〇六年)。但し、筆者が「帝国秩序」という用語を使う際は、こうした把握とはやや異なり、「帝国意識」に支えられた植民地内における支配秩序を想定している。

(79) こうした観点から「他者表象」論を扱う研究に対しては批判がいくつか存在する。第一に、池田淑子による従来の「他者表象」研究においては文化的機能が見落とされてしまっているとの批判である。池田は「：前略：他者表象の意味は、政治的機能や心理的作用に還元され、象徴的な意味作用つまり文化的機能が見落とされてしまっていると言えるだろう。他者表象は、

イデオロギー的な性質をもつ、有害なものとして批判され、人種差別的でエスノセントリズムに根ざしたものととして却下される。当然、他者表象の象徴的・文化的機能は探求されず、他者表象を作り出す側の共同体のアイデンティティもしくはそれらを創り出す文化的コンテクストを弁証法的に、逆説的に探求する重要な資料、すなわち研究対象としてはほとんど見なされてこなかったのである。本書は、他者表象を「権力と支配の装置」や「投影作用」に限定するのではなく、世界を理解し思考する道具であり、「共有する文化を構築する象徴的な道具」であるシンボル（象徴）といった、より広い視点から他者表象を捉え直したい」と指摘する（池田淑子『映画に見る日米相互イメージの変容―他者表象とナショナル・アイデンティティの視点から―』大阪大学出版会、二〇一四年、一八頁）。第二に、遠藤不比人が、従来の「他者表象」研究において「環太平洋」あるいは「日米関係」といった視点からの分析が不十分であるとの批判である。遠藤は「フーコー、サイード的な定義による表象（representation）としての「日本」の歴史化・政治化の作業は、いまや人文科学にあつて支配的な潮流である。具体的にいえば、とくに昨今この分野で精力的な成果をあげているカルチュラル・スタディーズと総称される分野においては、フーコー的な系譜学に基づき太古から連綿と続くとされる「日本的なもの」の大部分が、明治以後の「発明」であつた次第が実証的に論証されている。…中略…あ

るいはエドワード・サイード以後の「ポスト・コロニアリズム」研究がこうした学的な生産性の背後にあることは言うまでもない。しかし、このように活性化した研究の趨勢にもかかわらず、「日本」表象研究にあつて「環太平洋」あるいは「日米関係」という視点からの考察はまだ十分でない」と指摘している（遠藤不比人編著『日本表象の地政学―海洋・原爆・冷戦・ポップカルチャー―』彩流社、二〇一四年、四―五頁）。こうした指摘を意識して、今後の研究が進められる必要がある。

【付記】

本論文は平成二七年度 科学研究費補助金（基盤研究（C） 課題番号15K01900）「植民地朝鮮における「帝国秩序」形成に関する研究」による成果の一部である。